

教育用簡易版恋愛感情尺度の作成

豊田弘司

(奈良教育大学心理学教室)

岸田麻里

(奈良教育大学教育学研究科)

Development of Shorten version of Love Emotion Scale for Education

Hiroshi TOYOTA

(Department of Psychology, Nara University of Education)

Mari KISHIDA

(Graduate School of Education, Nara University of Education)

要旨：本研究の目的は、心理学の授業で教材として使用可能な恋愛感情尺度の簡易版を作成することであった。研究Ⅰでは、予備調査に基づき、大学生476名に対して、松井ら（1990）のLETS-2（Lee's Love Type Scale 2nd version）を実施し、因子分析から30項目を選択した。そして、選択した異性によって各恋愛感情得点の異なることを見いだした。研究Ⅱでは、「現在つきあっている異性もしくは将来つきあう異性」について、254名の女子大学生に研究Ⅰで選択された30項目を評定させた。各項目に対する評定値について因子分析の結果に基づき、松井ら（1990）のLETS-2と同じ6つの因子に対応する項目の負荷量が高い項目を3項目ずつ抽出し、合計18項目の簡易版恋愛類型尺度を作成した。この尺度の各因子ごとの α 係数は、.69～.84であり、信頼性をもつものと考えられた。

キーワード：恋愛感情 romantic love emotion、教育用恋愛感情尺度 Love Emotion Scale for Education

1. はじめに

心理学における重要なトピックとして、人間の感情もしくは情緒（emotion）があげられる。学部の授業においては、臨床的な問題を抱えた感情の複雑さを扱うよりも、その複雑性を客観的にとらえる姿勢を学習することが重要である。そのためには、複雑な感情を含んだ対象を題材としてあげる必要がある。そのような対象の一つが、恋愛感情である。

恋愛感情に関しては、Leeの理論（Lee, 1977）が有名である。松井（1993）は、Leeの理論における6つの類型をうまく紹介しているが、これらの恋愛類型を恋愛感情としてとらえると、以下ようになる。1）遊戯的感情（ルダス）は、恋愛を楽しもうとする感情であり、この感情があると、特定の相手ではなく、多くの相手とつき合い、特定の相手との適当な距離をとろうとする傾向が強くなる。2）実利的感情（プラグマ）は、相手とつきあうことによって、自分が損か得かに関わる感情であり、この感情があると、相手が自分にとってプラスになるか否かを考えることになる。

3）友愛的感情（ストーゲイ）は、相手に対する友情に近い感情であり、この感情があると、友達から恋人へ発展するのが望ましいと考えることになる。4）愛他的感情（アガペ）は、相手の幸せを喜ぶ感情であり、この感情があると、相手のためなら、自分を犠牲にしてもかまわないと考える傾向が増す。5）熱愛的感情（エロス）は、相手と自分がお互いに愛し合っているという感情であり、この感情があると、お互いが強く愛しあっているという実感を望む傾向が強くなる。6）狂気的感情（マニア）は、相手を独占したいという願望に関わる感情であり、この感情によって相手に対する嫉妬などの激しい行動が生まれる傾向が強くなる。

上記のような恋愛感情を類型として、その類型をとらえるために測定尺度（LETS-2；Lee's Love Type Scale 2nd version）を作成したのが、松井・木賊・立澤・大久保・大前・岡村・米田（1990）である。ただし、このLETS-2は測定項目数が多く、現在異性と交際していない者では評定が難しい項目もある。それ故、実施に時間がかかる点と、現在異性と交際していない者への配慮が必要であるとの点で、心理学の授業に教

材として使用することの問題があった。

そこで、本研究では、現在特定の異性と交際しているかいないかに関わらず、自分の恋愛感情が客観的に把握でき、実施時間も短い簡易版の恋愛感情尺度を開発することを目的とした。

2. 研究 I

2. 1. 目的

研究 I の目的は、LETS-2 (松井、1990) に含まれる項目の表現を修正した尺度を実施し、因子分析によって各恋愛感情に対応する項目として選択し、簡易版尺度の原版を作成することである。

2. 2. 方法

2. 2. 1. 被調査者

被調査者は、関西の私立大学法学部と文学部の大学生476名(男子225、女子251)であり、これらの学生の平均年齢は18歳4か月であった。

2. 2. 2. 調査内容

LETS-2 (松井ら、1990) の項目を使用した。ただし、これらの項目に対しては被調査者とは別の大学の

学生44名に対する予備調査を行い、回答しにくい項目はその表現を修正している。調査用紙はB6判であり、「家族以外で、最も親しい異性」(以下、彼(女))について尋ねる質問から構成されている旨の説明及び、その異性が、「恋人」、「友人」、「片思い」、「その他」のいずれにあてはまるかを選択させる欄が設けられた。そして、その下に53項目に対する回答を記入するための番号と空欄が印刷されていた。

2. 2. 3. 調査手続き

調査は集団的に行われた。被調査者は上述の調査用紙を配布され、「家族以外で、最も親しい異性」について以下の質問について答えるよう教示が与えられた。そして、調査者によって読み上げられる各項目が彼(女)に当てはまる(適合する)程度を5段階(「よくあてはまる」は5、「少しあてはまる」は4、「どちらでもない」は3、「あまりあてはまらない」は2、「まったく当てはまらない」は1)で考え、該当する数字を()に記入するように教示された。そして、調査者の読み上げる項目に回答していった。調査者の読み上げるペースは各項目につき、約10秒であった。

Table 1 教育用簡易版恋愛感情尺度(30項目)の因子構造(研究 I)

No. 項目	1	2	3	4	5	6	M	SD
狂气的感情 ($\alpha = .84$)								
21 彼(女)が私以外の異性と楽しそうに話していると、気になって仕方ない。	.74	.01	.12	-.06	.06	-.13	2.16	1.31
25 彼(女)は私だけのものであってほしい。	.72	.21	.16	-.03	-.10	-.07	2.49	1.42
28 彼(女)には、いつも私のことだけを考えてほしい。	.70	.11	.07	.07	-.11	-.17	2.86	1.35
10 彼(女)が私を気にかけてくれないとき、私はすっかり気がめいってしまう。	.69	.04	.00	-.02	-.05	.00	2.11	1.25
13 彼(女)が他の人とつき合っているのではないかと思うと、私は落ち着いていられない。	.66	.07	.15	.00	.02	-.07	2.45	1.40
熱愛的感情 ($\alpha = .82$)								
29 彼(女)と一緒にいると、私たちが本当に愛し合っていることを実感する。	.23	.77	.13	.03	-.08	-.04	3.46	1.41
14 彼(女)と私はお互いに結びついていると感じる。	.13	.76	.06	.03	-.07	.00	3.00	1.35
19 彼(女)と私はお互いに、本当に理解しあっている。	-.07	.68	.11	.01	.05	-.04	3.32	1.21
15 彼(女)と私はかなり早く、感情的にのめり込んでしまった。	.33	.53	.10	-.01	-.13	.02	3.48	1.38
3 彼(女)と私は会うとすぐにお互いひかれあった。	.21	.50	.17	-.02	-.06	.16	3.59	1.28
愛他的感情 ($\alpha = .75$)								
46 彼(女)のためなら、私はどんなことでも我慢できる。	.24	.12	.66	-.04	.06	-.07	3.38	1.15
12 彼(女)の望みをかなえるためなら、私は喜んで自分の望みを犠牲にできる。	.17	.12	.63	-.12	.00	-.09	3.54	1.20
9 私自身の幸福よりも彼(女)の幸福を優先したいと思う。	.08	.08	.56	-.09	.05	-.03	3.08	1.18
6 彼(女)が苦しむくらいなら、私が苦しんだ方がましだ。	.29	.16	.54	-.15	.03	-.11	2.71	1.23
40 たとえ彼(女)から全く愛されなくても、私は彼(女)を愛していきたい。	.11	-.08	.46	-.03	.14	.00	3.20	1.26
実利的感情 ($\alpha = .69$)								
53 恋人を選ぶとき、その人の将来性を考えてみる。	.07	-.02	-.20	.73	-.06	.09	3.59	1.27
52 恋人を選ぶとき、その人が私の経歴にどう影響するかを考えてみる。	.00	-.01	-.10	.60	-.12	.22	4.28	1.00
49 恋人を選ぶときには、その人が私の家族にどう受けとられるかを一番に考える。	.07	.06	.01	.51	.00	.03	4.17	1.10
48 私は恋人を選ぶ前に、自分の人生を慎重に計画しようとする。	-.14	-.03	.00	.49	.07	.09	3.51	1.31
47 私は、交際相手と深く関わる前に、その人がどんな人になるだろうかとよく考える。	-.06	.00	.06	.48	.16	-.04	3.01	1.43
友愛的感情 ($\alpha = .64$)								
59 私が最も満足している恋愛関係は、よい友情から発展してきた。	-.11	.08	.07	.06	.67	.06	2.97	1.37
54 最良の愛は、長い友情の中から育つと思う。	-.13	.00	.16	.16	.60	-.09	2.95	1.16
36 彼(女)とは、友人関係から自然に恋人関係へと発展した(させたい)。	.35	.04	.05	-.05	.47	-.03	2.35	1.40
16 私は彼(女)との友情を大切にしたい。	-.23	-.15	.10	-.01	.45	.10	2.14	1.23
35 彼(女)との交際が終わっても、友人でいたいと思う。	.06	-.02	-.03	-.09	.44	.07	2.02	1.34
遊戯的感情 ($\alpha = .56$)								
50 特定の交際相手を決めたくないと思う。	-.15	-.01	-.06	.12	-.01	.50	4.06	1.25
45 私は彼(女)にあれこれと干渉されるとその人と別れたい。	-.08	.05	-.16	.20	.02	.43	3.36	1.27
17 彼(女)が私に頼りすぎるときには、私は少し身を引きたい。	-.14	.05	-.20	.14	-.02	.39	3.30	1.32
20 彼(女)に期待をもたせたり、彼(女)が恋に夢中にならないように気をつけている。	.02	.06	.20	.09	.15	.39	3.84	1.17
58 交際相手から頼られたり、ベタベタされるのが嫌である。	-.27	-.24	-.05	.25	.09	.33	3.11	1.38
寄与率	10.21	8.88	7.01	5.87	5.63	4.26		

2. 3. 結果

2. 3. 1. 因子分析

各評定値について、主因子法による因子分析を行いバリマックス回転を施した。その結果、複数の因子に重複して因子負荷量の高かった項目を削除し、6つの感情に対応する項目の中で因子負荷量が高く、弁別性も高い項目を5項目ずつ計30項目を抽出した。これらの30項目について改めて主因子法による因子分析を行い、バリマックス回転を施した結果が、Table 1 に示されている。累積寄与率は41.86%であり、各因子における α 係数は.56~.84の範囲であり、第6因子の遊戯的感情尺度の α 係数が低かったが、満足できる値であった。

2. 3. 2. 「最も親しい異性」による違い

Table 1 に示した各感情に対応する項目の評定値を合計して、各感情尺度得点を算出した。そして、「最も親しい異性」の選択ごとに上記各感情尺度得点の平均値を算出した。その結果が、Table 2 に示されている。婚約者・配偶者を選択した者は男女それぞれ1名のみだったので、分析から除外した。また、性と「最も親しい異性」の組合せによる他の群においても、人数が少ないと統計的処理が不相当であると判断し、分析から除外した。さらに、「その他」の選択も、対象が特定できないのでこれもまた分析から除外した。したがって、以下の分析は、選択数の多かった「恋人」「片思い」及び「友だち」群間の比較になる。

性×異性型（「恋人」「片思い」及び「友だち」）の分散分析を6つの恋愛感情得点それぞれについて行った。その結果は以下の通りである。

2. 3. 2. 1. 狂気的感情

異性型の主効果 ($F_{(2, 348)} = 45.65, p < .001$) のみが有意であり、Scheffe法による多重比較の結果、友だち群が、恋人及び片思い群よりも狂気的感情得点が高く（ともに、 $p < .001$ ）、後2群間には有意差はなかった（友だち > 恋人 = 片思い）。

2. 3. 2. 2. 熱愛的感情

異性型の主効果 ($F_{(2, 348)} = 138.90, p < .001$) のみが有意であり、片思い及び友だち群が恋人群よりも得点が高く、前2者間に有意差はなかった（友だち = 片思い > 恋人）。

2. 3. 2. 3. 愛他的感情

性の主効果 ($F_{(1, 348)} = 8.99, p < .01$) が有意であり、女子が男子よりも得点が高かった。また、異性型の主効果 ($F_{(2, 348)} = 14.42, p < .001$) も有意であり、多重比較の結果、友だち群が恋人群 ($p < .05$) 及び片思い群 ($p < .001$) よりも得点が高く、他の2群間には差はなかった。

2. 3. 2. 4. 実利的感情

分散分析の結果、性の主効果 ($F = .33$) 及び異性型の主効果 ($F = .36$) 及び両者の交互作用 ($F = .66$) も有意でなかった。

2. 3. 2. 5. 友愛的感情

異性型の主効果 ($F_{(1, 348)} = 12.33, p < .001$) 及び性×異性型の交互作用 ($F_{(2, 348)} = 3.62, p < .05$) が有意であった。この交互作用について下位検定を行ったところ、女子において恋人群が片思い群及び友だち群よりも得点が高く（ともに、 $p < .001$ ）、後2群間には有意差はなかった。一方、男子においては3群間に有意差はなかった。

2. 3. 2. 6. 遊戯的感情

異性型の主効果 ($F_{(2, 348)} = 4.07, p < .05$) のみが有意であり、多重比較の結果、恋人群及び片思い群がともに友だち群よりも得点が高く（ともに、 $p < .001$ ）、後2群間に有意差はなかった。

2. 4. 考察

因子分析を行い、6つの恋愛感情に対してそれぞれ5項目ずつを抽出でき、 α 係数もおおむね満足できるものであった。また、各恋愛尺度の得点の比較を行ったが、異性型によって各尺度の得点が異なることが明

Table 2 対象及び性ごとの恋愛感情得点 (研究 I)

選択した異性	性	恋人		片思い		友だち		BF, GF*		親友		その他	
		n	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	
恋愛感情		51	60	55	72	61	56	19	5	21	8	17	39
狂気的感情	M	11.39	10.21	9.22	9.54	15.95	13.89	12.00	9.27	13.80	15.00	14.24	4.59
	SD	5.26	4.24	4.37	3.45	5.55	5.04	4.07	4.22	4.58	5.95	6.36	5.34
熱愛的感情	M	12.55	11.42	18.20	20.35	18.95	19.39	13.53	15.00	15.52	16.75	18.47	18.41
	SD	4.04	2.98	3.99	3.78	4.02	3.85	3.01	3.80	3.75	2.60	5.46	5.29
愛他的感情	M	14.88	16.35	13.58	15.17	16.79	17.68	14.42	17.00	15.00	17.25	16.76	17.59
	SD	4.78	4.12	4.02	3.88	4.20	3.89	3.55	3.34	3.71	4.10	4.92	4.06
実利的感情	M	18.41	18.75	19.09	18.65	18.84	18.07	18.68	18.27	19.00	16.50	19.53	17.46
	SD	4.98	3.82	3.85	3.88	4.07	4.03	4.14	3.88	4.55	5.21	4.60	3.73
友愛的感情	M	13.35	15.12	11.81	11.83	12.54	11.57	11.21	10.40	10.67	9.38	15.41	11.64
	SD	5.02	4.69	3.88	3.75	2.72	3.49	2.95	3.22	3.71	2.26	5.14	4.44
遊戯的感情	M	17.61	18.48	18.15	18.65	17.11	16.89	17.53	16.07	17.48	16.63	18.29	16.54
	SD	4.82	3.55	4.41	3.21	3.73	3.88	3.95	3.33	3.63	3.50	3.18	3.55

*BF・GFは、ボーイフレンド・ガールフレンド

らかになった。しかし、松井ら（1990）がLETS-2を実施して分析した結果は、愛他的感情（アガペ）において男子が女子よりも得点が高くなっている。しかし、本研究では総じて女子の方が高い。また、実利的感情（プラグマ）についても女子が男子より高かったが、本研究では差はない。さらに、遊戯的感情でも松井らでは女子が男子よりも高かったが、本研究では差はなかった。

このように項目を少なくしたために、従来の研究との違いがあり、この点については今後検討する余地がある。ただし、このような違いはあるものの、選択した異性によって尺度得点の違いがあることは、異性に対する感情を敏感にとらえることができることを示すものである。したがって、教育用としてこれらの項目を簡易版とすることも可能であろう。しかし、項目数が減ったとはいえ、まだ30項目であり、実施には時間がかかる。さらに項目数を限定して、教育用としての機能を高める必要がある。研究Ⅱでは、さらに項目数を限定して、教育用として実施が容易であり、かつ信頼性の高い尺度を作成する。

3. 研究Ⅱ

3. 1. 目的

研究Ⅱの目的は、研究Ⅰで抽出された30項目を実施

して、さらに各感情尺度3項目の尺度を作成することである。なお、この尺度はあくまでも感情の複雑さを受講生に説明するためのツールとして利用する尺度であるので、「最も親しい異性」を特定することは必要ではない。「最も親しい異性」をたずねる質問をした場合には現在特定のつきあっている異性がいない場合には回答に対する抵抗が生じる傾向があった。それ故、研究Ⅱでは、「最も親しい異性」という指示は与えずに、より一般的に「現在つきあっている異性もしくは将来つきあう異性」について回答を求めた。そして、それに伴って一部の項目において表現を修正した。

3. 2. 方法

3. 2. 1. 被調査者

被調査者は、関西の私立女子大学生254名であり、これらの学生の平均年齢18歳5か月であった。

3. 2. 2. 調査内容

調査にはB5判の評定調査用紙を使用した。この用紙には、研究Ⅰで抽出された30項目が印刷されていた。「最も親しい異性」ではなく、「現在つきあっている異性もしくは将来つきあう異性」について回答を求めたので、Table 3に示されているように、一部の項目において表現を（ ）つきで修正している。そして、研究Ⅰと同じく、項目のすぐ左横に適合する程度を示す数字を記入するための（ ）が印刷されていた。

Table 3 教育用簡易版恋愛感情尺度（18項目）の因子構造（研究Ⅱ）

	1	2	3	4	5	6	M	SD
愛他的感情 ($\alpha = .84$)								
彼(女)の幸福を、私自身の幸福よりも優先したいと思う。	.80	.05	-.16	.02	.12	-.08	2.63	1.11
彼(女)が苦しむくらいなら、私が苦しんだほうがよいと思う。	.79	.04	-.14	.02	.07	-.10	2.58	1.13
彼(女)の望みをかなえるためなら、私は喜んで自分の望みを犠牲にできると思う。	.73	.02	.00	.22	.11	-.19	2.17	1.06
友愛的感情 ($\alpha = .84$)								
彼(女)とは、友人関係から自然に恋愛関係へと発展した(させたいと思う)。	.04	.83	.05	.04	-.06	.13	3.24	1.22
彼(女)とは長い友人つきあいを経て、恋人になった(なりたいと思う)。	.11	.80	.09	-.07	-.12	.09	2.98	1.27
彼(女)との恋愛関係は、よい友情から発展した(させたいと思う)。	-.03	.76	-.01	-.07	.10	.00	3.64	1.33
実利的感情 ($\alpha = .78$)								
彼(女)を選ぶとき、その人が私にプラスになるかを考えてみた(考えると思う)。	-.03	.05	.74	-.01	.06	.18	3.54	1.20
彼(女)を選ぶとき、その人の将来性を考えてみた(考えると思う)。	-.13	.03	.74	.08	.08	.12	3.50	1.27
彼(女)とつき合う前に、その人がどんな人になるだろうかと考えた(考えると思う)。	-.11	.03	.69	.07	.03	-.02	3.19	1.21
狂氣的感情 ($\alpha = .73$)								
彼(女)が私以外の異性と楽しそうに話していると、気になると思う。	.02	.03	.06	.63	.26	-.06	4.09	0.96
彼(女)が他の人とつき合っているのではないかとと思うと、落ち着かないと思う。	.05	-.02	-.07	.62	.16	-.15	3.78	1.21
彼(女)が私を気にかけてくれないとき、私は気がめいってしまうと思う。	.13	-.11	.16	.60	.15	-.10	3.28	1.19
熱愛的感情 ($\alpha = .71$)								
彼(女)と私はお互いに結びついていると感じる(感じたいと思う)。	.16	.03	.04	.29	.71	-.10	3.69	1.05
彼(女)と私が愛し合っていることを実感している(実感したいと思う)。	.10	-.05	.09	.30	.69	-.14	4.06	0.91
彼(女)と私はお互いにすぐに感情的にのめり込んでしまった(しまうと思う)。	.13	-.11	.13	.28	.36	-.22	2.80	1.05
遊戯的感情 ($\alpha = .69$)								
彼(女)からベタベタされると、嫌になると思う。	-.17	.10	.05	-.28	-.07	.64	3.02	1.28
彼(女)が私に頼りすぎるときには、身を引きたくなると思う。	-.19	.03	.07	.02	-.10	.63	3.40	1.21
彼(女)が、私との恋愛に夢中にならないようにしようと思う。	.01	.09	.20	-.18	-.14	.49	2.67	1.11
寄与率	11.00	10.90	9.69	8.72	7.42	7.17		

3. 2. 3. 調査手続き

調査は集団的に行われた。被調査者は上述の評定尺度用紙を配布され、「現在つきあっている異性もしくは将来つきあう異性」について以下の質問について答えるよう教示が与えられた。そして、調査者によって読み上げられる各項目が交際中の異性もしくは将来交際する異性に当てはまる（適合する）程度を研究Ⅰと同じく、5段階で評定した。

3. 3. 結果

各評定値について、主因子法による因子分析を行い、バリマックス回転を施した。その結果、複数の因子に重複して因子負荷量の高かった12項目を削除し、残りの18項目について、因子分析を行った結果、6つの因子が抽出された。これらの因子分析の結果がTable 3に示されている。累積寄与率は54.90%であり、各因子における α 係数は.69～.84の範囲であり、満足できるものであった。

この尺度はあくまでも教育用であるので、この尺度を授業で用いる場合は学生に対して各因子に対応する感情の説明を行うことになる。その際に、学生自身が自己の感情の程度を判断する基準が必要になるので、Table 4には、各因子に対応する3項目ずつの合計点の平均点を示した。満点と同じであるが、一応、どの感情が得点が高いかを比較するために分散分析を行ったところ、恋愛感情型の主効果が有意であり ($F_{(5, 1265)} = 56.35, p < .001$)、多重比較を行った結果、狂气的感情が他の5つのどの感情よりも得点が高く (いずれも $p < .001$)、熱愛的感情も友愛、愛他及び遊戯的感情よりも得点が高かった (いずれも $p < .001$) が実利的感情との間に有意差はなかった。また、実利的感情は、友愛的感情との間に有意差はないが、遊戯及び愛他的感情よりも得点が高かった。さらに、友愛的感情は、遊戯及び愛他的感情よりも得点が高く (それぞれ $p < .001$ 、 $p < .01$)、遊戯的感情は愛他的感情よりも得点が高かった ($p < .001$)。したがって、上記の結果をまとめると、おおよそ、狂気 > 熱愛 \geq 実利 \geq 友愛 > 遊戯 > 愛他的感情という関係になった。

3. 4. 考察

研究Ⅱの目的は、研究Ⅰで抽出された30項目からさらに精選された項目を抽出し、教育用簡易版恋愛感情尺度を作成することであった。因子分析の結果から、Leeの理論 (Lee, 1977) に基づく6つの感情に対応する3項目ずつの計18項目からなる尺度を完成させた。

Table 4 恋愛感情ごとの平均尺度得点 (研究Ⅱ)

恋愛感情	愛他	友愛	実利	狂気	熱愛	遊戯
M	7.39	9.86	10.23	11.16	10.55	9.09
SD	2.87	3.30	3.07	2.64	2.40	2.77

各感情に対応する下位尺度の α 係数も満足できるものであり、信頼性のあることが示された。

この尺度は恋愛感情に対応する下位尺度が3項目からなるので、実施時間が節約でき、採点も容易である。それ故、教育用尺度としては適切なものが完成できた。ただし、本研究では、当初、30項目で調査を実施したので、18項目での実施は検討されていなかった。今後の課題としては、実際に18項目で実施した結果、研究Ⅱのような因子構造が得られるか否かを検討する必要がある。さらに、研究Ⅱの調査対象は女子学生のみであったので、男子学生に対しても実施し、その一般性を確認する必要があるだろう。

3. 5. 総合的考察

本研究は、教育用恋愛感情尺度として18項目を精選し、一定の信頼性を示すことができた。このような簡易版尺度は、大学の授業はもちろんであるが、高校生への授業の教材としても利用できるものであろう。第一著者も大学教員として高校での模擬授業を依頼されることが多い。大学生でも教員の話ばかりではすぐに飽きてしまう現状を考慮すると、高校生に話ばかりで通すのは、よほど高校生の興味関心をひく話でないと難しい。しかし、高校生と日頃の生活を共有していない大学教員にとっては高校生の興味関心を熟知することは無理というものである。そこで、本尺度のような教材があれば、実際に高校生が尺度の項目に答える中で、自然と興味を示す可能性は高い。そして、このような教材を利用することで、大学の学問に対する興味関心が増し、さらに心理学への関心が芽生えれば、この尺度の教材としての価値は高いといえるだろう。誰でも、自分を知りたいという気持ちはある。それ故、その気持ちを刺激する教材というのは、授業の導入において有効なものとして活用できるだろう。

4. 引用文献

- Lee, J. A. 1977 A typology of styles of loving. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 3, 172-182. (松井, 1993による)
- 松井 豊 1993「恋ごろの科学」サイエンス社
- 松井 豊・木賊知美・立澤晴美・大久保宏美・大前晴美・岡村美樹・米田佳美 1990 青年の恋愛に関する測定尺度の構成 東京都立立川短期大学紀要, 23, 13-23.

付記

研究Ⅱのデータ入力には、奈良教育大学総合教育課程生涯学習コース生涯教育臨床専修4回生の小林加奈さん、大賀香織さん、学校教育教員養成課程教育・発達基礎コースの心理学専攻4回生高野由希恵さん、島津美野さんの協力を得た。記して感謝の意を表します。